

キャリアパスとしての有期雇用を考える —世界と日本の経験をつなぐ—

- 近年、日本を含む世界のアカデミックの現場では、少子高齢化に伴い大学・教育機関の規模が縮小傾向を見せる中で、「パーマネント」ポストが減少し、「有期雇用」でのキャリア形成を余儀なくされる若手・中堅研究者の層が拡大している。過渡期的ポストと見られることの多い有期雇用だが、いったん歴史的文脈や、世界の多文化的環境の中に置き直して考えてみれば、「期限付き」であったからこそなした人と人とのよりよい関係のあり方や、情報やモノのやり取りなど、「有期であること」がより良い共同体や社会の発展に寄与している事例も少なくない。
- 本ワークショップでは、大学や研究機関に、任期付きの形で雇用されている若手・中堅の地域研究者が集まって、それぞれが研究対象とする地域や事象に即して、有期雇用という形態がどのような形で実現されているのか、そこにある工夫やアイデアについての報告を行う。そのうえで、一定の時間軸が区切られた状態で人と人との関係がとり結ばれることが、私たちが現在生きるこの社会にとって、どのような意味を持ちうるのかについて議論する。

- 開催日時(予定):

2015年1月24日(土)13時~17時

- 開催場所: 東京大学 東洋文化研究所

- プログラム

後藤絵美(東京大学)

「非常勤講師として今を語る—イスラム教に対する認識改革の試み」

福田州平(大阪大学)

「Ephemeral Vistas?—万博という場で結ばれる関係」、

伊藤未帆(東京大学)

「ジョブホッピング! ?いいえこれが私のキャリアパス」

谷川竜一(京都大学)

コメント: 江口佳子(リクルート就職みらい研究所)